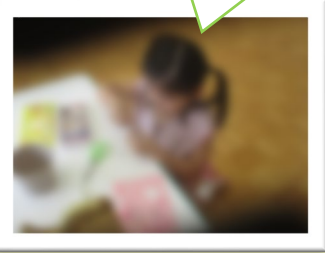


「木の実へ向ける思い」

遊びの様子を見ているとぬいぐるみや虫、木の実など身の回りにある様々なものと心を通わし、大切に作る姿があります。一見するとただの“物”と捉えられてしまうものはこどもたちにとってどのような存在なのでしょう。拾ったコブシの実と一緒に過ごすKさんの姿から考えていきたいと思います。



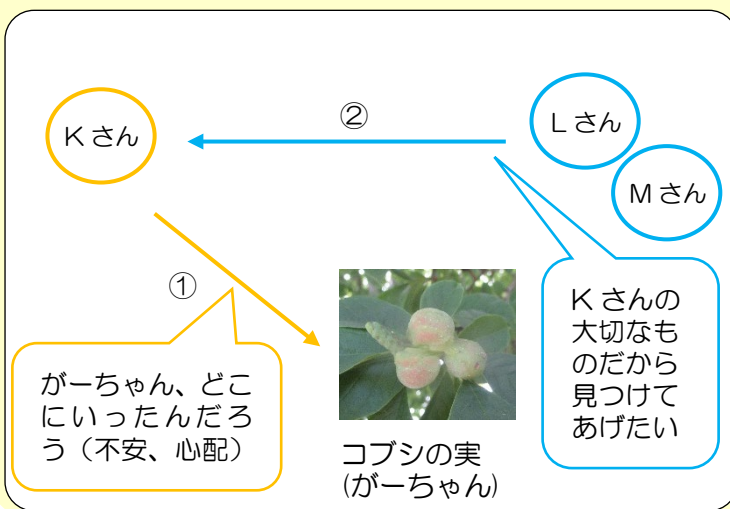
がーちゃんをもっと素敵にしたい！



ある日、Kさんが園庭でコブシの実を見つけ家に持って帰りました。鳥のような形のコブシの実をアヒルに見立て「がーちゃん」と名付けました。翌日、画用紙の洋服を着せたがーちゃんと一緒に嬉しそうに登園しました。すぐに「がーちゃんっていうの。今日は、ピンクの帽子を作るんだ」と話し、着替え終わると、さっそく画用紙で帽子を作り始めました。クレヨンで何度も丸を描き、がーちゃんにぴったりの大きさになった丸を切り取り、帽子ができあがりました。作り終えた時に学級のみんなで自然観察園へ出かける時間だったため、机の上にがーちゃんを置いていきました。

戻ってくると、机の上からがーちゃんがいなくなっていました。自分が行った場所を思い出しながら園庭を探していると、Lさんがその様子に気付いて声をかけてくれました。「がーちゃんがいなくなっちゃ

ったの。ピンクの帽子を被ってるの」と話しをすると、「一緒に探してあげる」とLさんもがーちゃん探しに加わりました。しばらくすると、砂場にいたMさんが「がーちゃんあったよ」とKさんに届けてくれました。見つかった後、Kさんは嬉しそうにがーちゃんと話しをしたり、お弁当を食べたりして幼稚園でのひとときを過ごしました。



拾ったコブシの実の形がアヒルのように見えたことで、Kさんは“がーちゃん”と名前を付けました。そこから、がーちゃんはKさんにとってより大切な存在となり、丁寧に洋服や帽子を作ったり、肌身離さず持ち歩いたりするようになりました(①)。はじめは、がーちゃんの存在はKさんだけの大切なものでした。しかし、Kさんの姿から、がーちゃんが大切な存在だという気持ちが周りにいた人にも少しずつ広がり、がーちゃんを気にかけたり、大切にしたりする人が増えていきました(②)。

がーちゃんを大切に作るKさんの姿からは、身の回りのどんなものでも、こどもたちが思いを寄せた瞬間からそれは宝物になっていくということやその思いが周りにも広がっていくことに気付かされます。こどもたちの見ている世界では、落ちている木の実一つとっても大切な宝物に変わっていきます。そんなこどもたちの頭や心の中に広がる豊かな世界を大切にしていきたいです。

(石関 萌)